

「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」

についてーその概要から

上智大学 総合人間科学部 社会学科
教授 藤村 正之

1. はじめにー調査の位置づけ

2010年代の政治・経済・社会が流動化するグローバル化の中で、若者たちは社会に翻弄される存在として議論されることが多くなっている。ほんの20年前まで、若者と言えば自由な生き方の代名詞であった。そのような論調の変化の背景には、もちろん社会構造の変化が影響しているのだが、当の若者たちは自らをどのように認識しているのだろうか。

各種メンバーの世代交代がありながら、30年ほどの研究歴を有し、2006年より私が研究代表を務める「青少年研究会」では、若者たちの実情を定期的に把握するため、10年ごとの大型調査を実施してきている。今回、2011年度から「科学研究費・基盤研究(A)」の3年間の研究が認められ、1992年(総合研究(A))、2002年(基盤研究(A))の科研費研究に続く、若者文化の3回目の総合的な調査を2012年に行うことができることとなった。この種の総合的・経時的な調査は他にあまり例がなく、今回の研究でもその経験を活かし、3回目の調査では世代内・世代間の比較を盛込んで、若者と社会変動の関係を実証的に考察していくことを課題とした。

本研究の目的は、都市を生きる若者たちの行動と意識の実態把握を基礎に、彼らの社会化過程における変化とその諸影響を理解することである。その際、今回の調査では、現在の若者たちに先行する世代である

30代、40代の世代の行動・意識を併せて比較調査することで、複雑化する今日の社会化過程を世代内・世代間で実証的かつ立体的に把握することを試みることにした。

今回、30代・40代層を若者たちの比較対象として設定することで、過去2回の調査を踏まえ、私たちは、①2012年の若者たち(16歳～29歳)の現状の把握、②過去3回の調査による若者たちの変化の様相の把握(1992年・2002年・2012年調査の比較)、③2012年における若者世代(16歳～29歳)と中年世代(30歳～49歳)の比較、④過去3回調査で分析可能なコーホートの加齢による変化の分析(1992年の20歳の者が2012年に40歳となったの比較など)という4つの観点での分析が可能となり、それらに取り組みことを課題としてきている。

本概要報告では、これらのうち一部のデータについて触れるのみであり、今後上記の各分析について研究を進めていく予定である。3回目の調査も過去2回と同様、東京都・杉並区、神戸市・灘区・東灘区にお住まいの方々を対象に、2012年11月～12月に調査実査をおこなった。具体的な調査概要は表1の通りであり、計画サンプル4,200票のうち、若者世代1,050票(回収率43.7%)、中年世代719票(回収率39.9%)の回収という結果となった。調査にご回答いただいた杉並区・神戸市の皆さま並びに実査にあたっていただいた新情報センターのスタッフ各位に厚くお礼申し上げること

としたい。

表 1 調査概要

研究種別	日本学術振興会・科学研究費・基盤研究(A)(2011年度～2013年度)
調査実施時期	2012年11～12月実施
調査実施機関	(社)新情報センター
対象地	東京都杉並区、神戸市灘区・東灘区
対象年齢	16歳～29歳(若年票)、30歳～49歳(中年票)
調査方法	住民基本台帳を用いた層化2段無作為抽出によるアンケート調査 (訪問留置回収法・一部郵送回収法併用)
計画サンプル	標本数4,200票(杉並16歳～29歳1,200、30歳～49歳900) (神戸16歳～29歳1,200、30歳～49歳900)
有効回収票	16歳～29歳 1,050票 回収率43.7%【男：女=46.4%：53.6%】 30歳～49歳 719票 回収率39.9%【男：女=46.6%：53.4%】

2. 単純集計の主な結果から

調査は、若者たちの行動や意識の特徴を複数の角度からとらえるために、(1)音楽、(2)メディア、(3)友人関係、(4)家族関係や恋人関係、(5)自己意識、(6)社会意識などに関する調査項目が過去2回の調査との継続や現段階での関心から検討され、フェイス・シートと共に尋ねられた(16～29歳票：全52問(247ジャッジ)とフェイスシート15問(27ジャッジ))。比較対象となる30～49歳の方では若年票と同じ項目を基準に、年齢段階に応じて一部異なる項目を組み込むこととした(30～49歳票：全50問(225ジャッジ)とフェイスシート19問

(33ジャッジ))。まずは、16～29歳票の単純集計結果の中から、興味深い主なポイントを確認してみよう。

(1) 音楽

音楽のジャンル分けというのは、分類区分にイメージ性が強かったり時代が反映していたり、また本人の認識による相違といった点があるが、好きな音楽ジャンルを聞いたところ、第1位が「Jポップ」75.7%、第2位が「邦楽ロック」38.2%、第3位が「洋楽ポップ」34.3%、第4位が「アニメ・声優・ゲーム」30.8%、第5位が「洋楽ロック」30.0%となった(表2)。

表 2 好きな音楽ジャンルの順位 (16～29歳)

順位	ジャンル名	%	度数	順位	ジャンル名	%	度数
1	Jポップ	75.7	795	12	洋楽ヒップホップ	15.1	159
2	邦楽ロック	38.2	401	13	同人音楽・ボカロ	13.2	139
3	洋楽ポップ	34.3	360	14	Jラップ	9.1	96
4	アニメ・声優・ゲーム	30.8	323	15	ハウス・テクノ	9.0	94
5	洋楽ロック	30.0	315	16	パンク	8.3	87
6	映画音楽・サントラ	25.9	272	17	ヴィジュアル系	7.0	74
7	クラシック	21.4	225	18	洋楽レゲエ	6.2	65
8	アイドル	18.1	190	19	演歌・歌謡曲	6.2	65
9	ジャズ	17.9	188	20	ジャパレゲ	5.9	62
10	R&B	17.5	184	21	ヘヴィメタル	5.7	60
11	Kポップ	16.2	170	22	フォーク・ニューミュージック	5.6	59

分類方法によるとはいえ、「J ポップ」が断トツの数値を示しており、4人に3人がこれを支持している。興味深いのは、「アニメ・声優・ゲーム」が3割の支持で第4位に入っており、いわゆるオタク系文化がマイナーな位置づけであるとか恥ずかしいという印象ではなく、若者たちの間で確実な市民権を得た文化となってきていることがわかる。

(2) メディア

現代社会のメディア変動として大きいのはインターネットの隆盛であるが、それがPC利用にとどまらず、スマートフォンなどを通じて手近なところで操作可能となっており、自分の手の中にウェブ空間があるような状態になっていることが大きい。そのような状況を踏まえ、普段インターネットにアクセスして、どのようなことをしているかを問うと、「動画サイトを見る」がもっとも高く76.9%となり、これも4人に3人がそういう行動を取っていることになる。

やや受動的ではあるものの、テレビに比肩しうる映像消費メディアとして市民権を得ている。続いて、「Twitterを読む・書き込む」45.2%、「2ちゃんねる」を読む・書き込む」24.9%、これに「オンラインゲームで遊ぶ」が22.4%で続いている。「Twitterを読む・書き込む」が半数に近いが、若者たちにとって140字以内という短文での気持ちや情報の伝え合いに大きな関心があることがわかる。

(3) 友人関係

いつの世もそうであろうが、友人関係は若者たちにとって重要な人間関係である。近年は特に交友関係の輪の狭まりと、他方でその狭い範囲での交友関係の密度の高さ

が指摘されている。そのような友人関係を作るとき、次のようなメディアの使用やその話題が役に立ったことはあるかを問うと、「音楽の話題」47.8%、「テレビ番組の話題」38.0%、「マンガの話題」36.4%、「ブログやSNSの利用」33.5%、「携帯電話での通話やメール」32.0%となった。「音楽の話題」というのが本人の趣味・志向を端的に示し、他方でジャンルの好みなど相互の違いを認めうる題材となっているのであろう。

続いて、テレビや漫画というコンテンツが、またブログ・SNS・通話・メールといった近年変化の大きい通信事情が交友関係の形成のキー要因となっている。

(4) 恋人関係

友人関係と並び、若者たちにとってその時期の特徴的な事象とも言えるのが、恋愛関係の経験であろう。恋愛や恋人関係において重要視することがどんなことか問うてみると、「やさしさ」79.2%がトップであり、これに「一緒にいるときの安心感」73.8%が7割台として続く。さらに、「気づかいができる」59.4%、「おもしろさ」51.1%、「趣味に理解がある」49.6%、「生き方・ライフスタイル」44.3%、「顔」43.3%と続いていく。恋人など相手に求めるものとして「やさしさ」が上位にくるのは数十年続いているわけだが、加えて安心感や気づかいといった恋愛関係にある人との落ち着いた快適な空間という点が重要になっていると判断できる。

(5) 自己意識

また、若者時代における精神的な課題として現れるひとつがアイデンティティの形成やそのありようである。時代による変容を大きく受けるところであるが、若者たち

に自分に対するいくつかの評価を問うてみると、「自分は友人関係に恵まれている」62.0%がもっとも多く、以下、「性格は悪くないほうだ」45.9%、「他の人になんか特技・才能がある」19.8%、「勉強は得意なほうだ」15.9%、「ルックスは人並み以上だ」14.3%が続く。6割を超える者が友人関係からの支えを挙げていることは、自分という存在が交友関係によって規定されているという発想が示されている。また、「性格は悪くない」という自己肯定はちょうど半々という興味深い数値になっている。

(6) 社会意識

若者たちの社会への関わり意識もいくつかの設問によって聞いているが、どんなときに充実しているかと問うた質問に対しては、「友人や仲間といるとき」80.8%、「スポーツや趣味の活動をしているとき」67.2%、「親しい異性といるとき」45.4%、「家族といるとき」44.1%、「他人にわずらわされず、一人でいるとき」37.1%、「仕

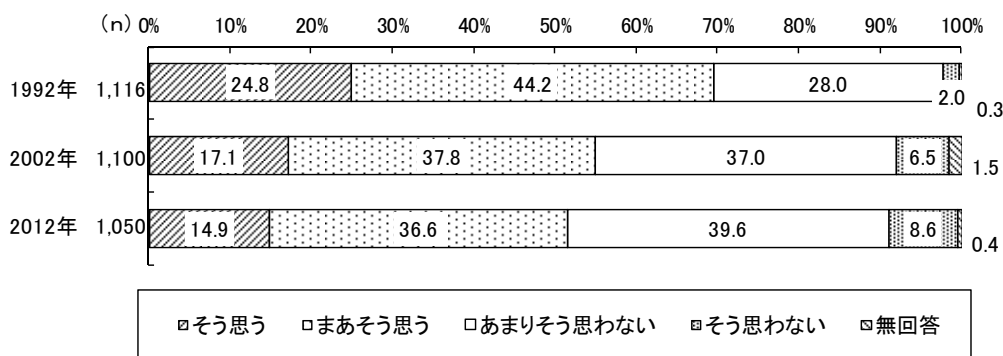
事やアルバイトをしているとき」37.1%が高い数値となっている。基本的には、友人・仲間・恋人・家族といった人間関係の中で充実感が回答されているが、ひとりでのときの充実感を唱える者も4割に近い。

3. 時系列比較の試み

今回の調査が92年、02年、12年に続く3回目の調査であることから、3時点比較が可能な設問、2時点比較が可能な設問がいくつかある。それらにより、ある一定の方向への傾向が確認できる事象もあれば、それら比較された時点の間に大きな変化がなくむしろ安定的な傾向を示す事象がある。主なものを拾ってみよう。

まず、3時点の変化の傾向が顕著なものである。「どんな場面でも自分を貫くことが大切だ」に関して、「そう思う」と「まあそう思う」を合わせて「思う」として集計すると、「思う」は92年で69.0%、02年で54.9%、12年で51.5%となる(図1)。

図1 「どんな場面でも自分を貫くことが大切だ」時系列(16~29歳)



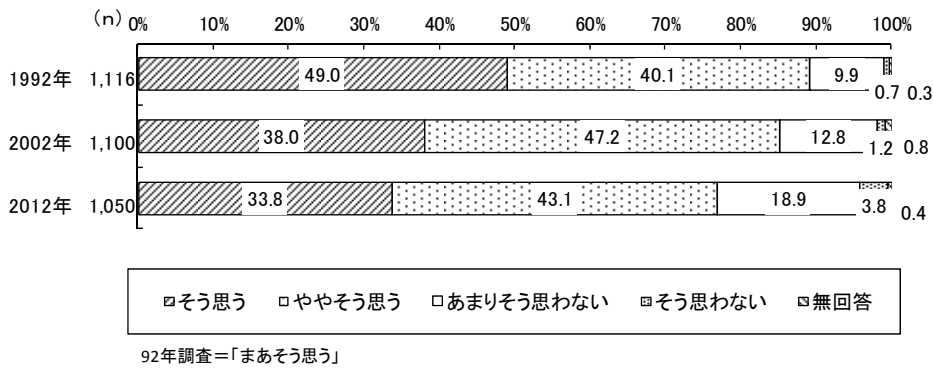
明らかに自分を押し通すという方向性が歓迎されないものとなってきており、自己主張をするという形では弱くなってきている。同様に、「自分には自分らしさという

ものがある」という問いに対して、「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた「思う」を見ると、92年で89.1%、02年で85.2%、12年で76.9%となる(図2)。現在でも

76.9%と、4人に3人が自分らしさがあると答えているものの、20年前の92年のその数値が89.1%と10人中9人が答えていることと比べれば、自分らしさに自信を持ってない者が一定程度増えてきているという

ことがわかる。これら2つの質問からは、自分を貫くことが高くは評価されず、自分自身にも自信を持ってない層がある程度増えてきているということは言えよう。

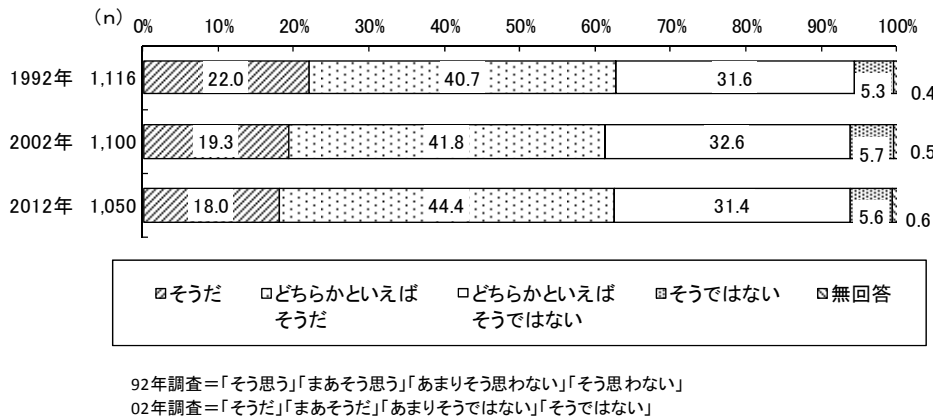
図2 「自分には自分らしさというものがあると思う」時系列（16～29歳）



続いて、逆に3時点の調査で大きな変化がなく、安定的な数値を示すものを見てみよう。「将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」という設問がそれであり、「そうだ」と「どちらかといえばそうだ」を合わせて「そうだ」として見てみる

と、92年は62.7%、02年は61.1%、12年は62.4%となる（図3）。今という時間を大切にしたいとする者が約6割、将来に備えて耐えるとする者が約4割という比率がここ20年間安定的な形となっている。

図3 「将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」時系列（16～29歳）



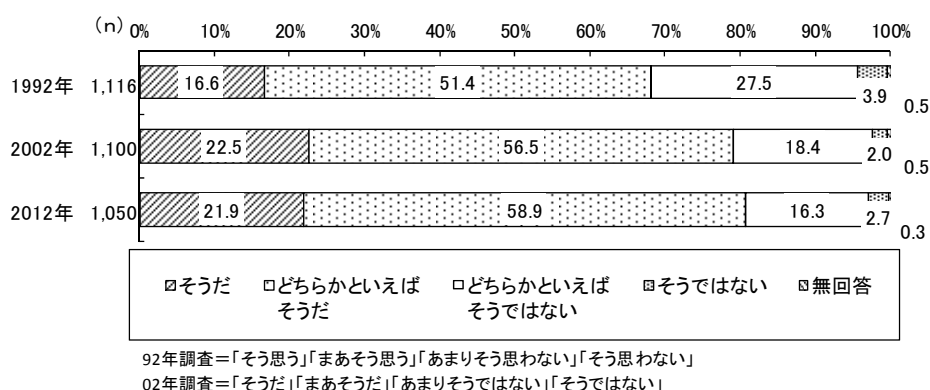
また、92年から02年にかけて上昇し、02年から12年にかけては変化が少ないものとして、「社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」という設問が挙げられる。「そうだ」と「どちらかといえばそうだ」を合わせて「そうだ」として見てみると、92年は68.0%なのだが、02年は79.0%と上昇し、12年は80.8%と微増している（図4）。

強く言えば、いわゆる「ミーイズム」という発想になるが、全体として92年におい

ても7割程度と定着してきているところ、02年に8割に上がり、12年もその比率は継続しているということになる。

以上のように、3時点で一定方向の変化が見られるもの、大きな変化なく安定しているものに加え、詳細に見れば山型・谷型など数値の動きが反転するようなものもありうるかもしれない。反復調査による蓄積の利点というものがこれらのデータには表れていると言えよう。

図4 「社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」時系列（16～29歳）



4. 世代比較の試み

今回の調査では、16～29歳の比較対象として30～49歳を設定し、一部年齢にあった設問に変えた部分はあるものの基本的には同じ調査票にて調査を実施した。その結果、16～29歳という若年層と30～49歳という中年層との比較が可能であり、同時に過去2回の若者調査のデータを有することから、一部の質問にとどまるものの、特定コーホートが92年調査の20代、20年調査の30代、12年調査の40代という形でどう変化してきたかを追跡することも可能となっている。分析結果については今後の発表・報告ということになるが、ここでは、16～29

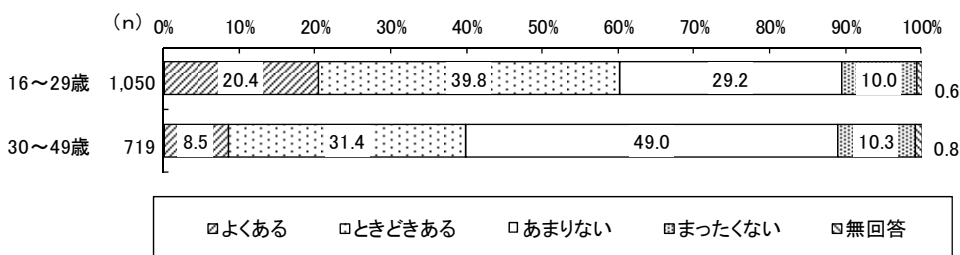
歳という若年層と30～49歳という中年層の比較から興味深いデータをひいてみよう。

まず、先に16～29歳での好きな音楽ジャンルについての回答を触れたが、これを30～49歳の中年層で確認するとどうか。結果は、第1位が「Jポップ」67.7%、第2位が「邦楽ポップ」32.7%、第3位が「洋楽ロック」31.2%、第4位が「邦楽ロック」30.1%で、第5位が「クラシック」30.0%であった。「Jポップ」が断トツで、若年層では75.7%であったが中年層でも67.7%であり、他のジャンルが30%台で競っているという構造は変わらない。中年層では「クラシック」が第5位に入っているのが特徴

で、若者層で 30.8%で第4位だった「アニメ・声優・ゲーム」は 12.1%と大幅に数値を落としている。クラシックへの関心が年齢の高い層で多く、また、オタク系文化の浸透ということは中年層にまでは及んでいないことがわかる。若年層での変化がそのまま年齢の上昇とともに中年層の変化としても引き起こされていくのかは今後の経験に開かれている。

若年層と中年層の比較において興味深いものとして、自分への親しい人や世間の視線という問題を取り上げてみよう。「親しい人から自分がどう思われているかが気になる」という回答は、「よくある」と「ときどきある」を合わせた「ある」について、16～29歳で 60.2%なのに対し、30～49歳では 39.9%である（図5）。

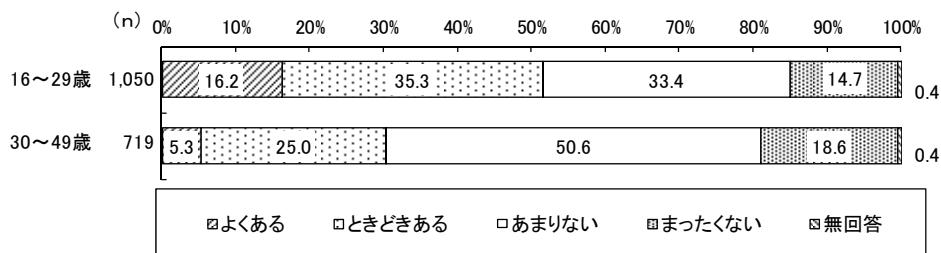
図5 「親しい人から自分がどう思われているかが気になる」世代比較



同様に、「親しい人以外の世間から自分がどう思われているかが気になる」という回答は、「よくある」と「ときどきある」を合わせた「ある」について、16～29歳で 51.5%

なのに対し、30～49歳では 30.3%である（図6）。共に 20%を超える数値差となっており、若年層の方が親しい人並びに世間からの視線を強く感じていることがわかる。

図6 「親しい人以外の世間から自分がどう思われているかが気になる」世代比較

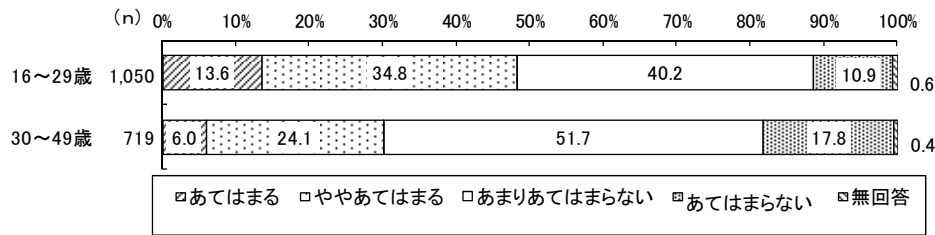


同じく、「一生懸命物事に取り組んでも成果に結びつかないと意味がないと思う」への回答は、「あてはまる」と「ややあてはまる」を合わせてみると、16～29歳で 48.4%なのに対し、30～49歳では 30.1%である

（図7）。努力が結果に結びつくことを期待するという姿勢は若年層に顕著であり、中年層は努力が結果に結びつかないこともあるし、そうだからといって意味がないわけではないという判断を下しているというふ

うに考えられるだろうか。

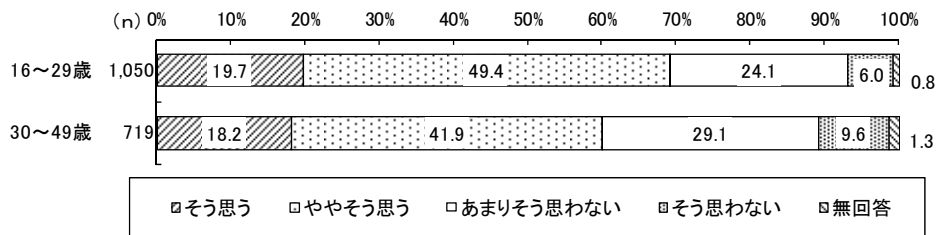
図7 「一生懸命に物事に取り組んでも成果に結びつかないと意味がないと思う」世代比較



また、若年層は常に革新的な意見の持ち主であるということもない。「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」への

回答は、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた「思う」を見てみると、16~29歳では69.1%なのに対し、30~49歳では60.1%である(図8)。

図8 「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」世代比較



高齢期における老親との同居とそこでの扶養をほぼ7割の若年層が支持するのに対し、中年層でのそれは6割にとどまる。若年層の方はまだ比較的元気な自分の親を想定しながら答え、中年層は今後予想されるあるいは現在経験中の自らの年老いた親の世話を想定しながら現実的に答えているという可能性も高いが、若年層の方で親子関係を重要視する態度を示しているということは興味深い。いわゆる「ゆとり世代」とも言われ、ほどほどの目標で満足し、あまり競争を好まない世代層として言われるが、それが親子関係の良好さと子どもの側からの好意的対応につながっているということ

も予想されよう。

以上、「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」に関して、単純集計、3時点・2時点の時系列比較、世代比較について、興味深いデータをいくつか拾ってきた。2012年の単年度の若者の意識や行動の分析にとどまらない広がりのあるデータセットとなっている。10年ぶりの科研費調査という有益な機会をいただき、それに見合う研究成果に向けて分析の努力を引き続き重ねていきたいと考えている。

[研究の概要、データの一部紹介並びに各種研究成果の発表先・掲載先については、青少年研究会のホームページをご覧ください]

れば幸いである。

(青少年研究会 : <http://jysg.jp>)

筆者プロフィール

藤村 正之 (ふじむら まさゆき)

1957 年生まれ。筑波大学大学院社会科学部研究科社会学専攻修了。博士(社会学)。東京都立大学助手、武蔵大学助教授・教授などを経て、2005 年より上智大学総合人間科学部教授。専門は、福祉社会学・文化社会学・社会学方法論。主要著作に、『福祉国家の再編成』(東京大学出版会、1999 年)、『〈生〉の社会学』(東京大学出版会、2008 年)、『社会学』(共著、有斐閣、2007 年)、『いのちとライフコースの社会学』(編、弘文堂、2011 年)、『協働性の福祉社会学』(編、東京大学出版会、2013 年) など。

